



SV-1 (MI-12150)

◀このシリーズ唯一のプリアンプでモノラル設計となっている。基本的にはパワーアンプから電源の供給を受ける設計になっているため、SP-10、SP-20とセットで使うことが前提となる。大きさはかなりコンパクトながらパワーアンプの魅力を最大限引き出すその再現能力は目を見張る物がある。生産台数がとても少ないアンプで滅多にペアでお目にかかることがなく、シリーズ中で最もレアな製品。市場価格は20～25万円ペア



SVP-10 (MI-12198)

↑とてもコンパクトなボディにラインセクターとメインボリューム、高域、低域のトーンコントロールの4つのつまみが付いているライン入力専用のモノラルプリアンプ。ビーム管6V 6による2本のプッシュプル動作で10W出力となっている。くせのない滑らかなツヤのある音色は小音量でも音楽を楽しませてくれる。市場価格は18～22万円ペア



SP-10 (MI-12190)

↑出力管にビーム管6V 6を2本でプッシュプル動作させた10W出力のモノラルアンプ。主にhigh-fidelityシリーズの20～30cmのスピーカーを鳴らすことを目的として製作されたようだ。質の良いUTCのトランスが使われ、音は出力管6V 6の特徴である切れ味のいい中低域と美しい高域の音色が良くマッチする。市場価格は30～35万円ペア

Retro-Future

古くて新しい もうひとつのビンテージオーディオ

ビンテージといえば、アルテックやタンノイ、JBL、マッキントッシュ等が誌面に取り上げられる機会が多い。しかし、当時これらの老舗と肩を並べる他の多くのブランドがあったことを知る人は少ないだろう。東京、目黒にあるビンテージショップ「アトリエJe-tee」では、音質はもちろん、デザインにもこだわった「もうひとつのビンテージ」を数多く紹介している。本企画では、同店で販売されている製品を中心に、毎号テーマとなるブランドを取り上げている。

SP-20 (MI-12191)

high-fidelity シリーズの中でも大型の30×38cmのスピーカーシステムを鳴らすために設計された、シリーズ最高クラスのパワーアンプ。3個のUTCトランスが搭載され、ビーム管6V 6を4本でパラレルプッシュプル動作させた20W出力のモノラルアンプとなっている。重心が低く安定感の良い低音と、美しくきつくと伸びた中高音は大型のモニタースピーカーも十分にコントロールしてくれる。市場価格は38～45万円ペア

第6回 RCA

vol.2 (high-fidelity line)

RCAは50年代に入ると放送局や映画館などのプロフェッショナルラインと平行して、その高い技術力をふんだんに盛り込んだ high-fidelity (ハイファイデリティ) と呼ばれるシリーズを発表する。とても目を引くブルーの塗装でまとめた同シリーズはコンシューマー用のニーズにも対応することも目的として設計されているため、一般的な居住空間でも高い音楽の再生能力を発揮してくれる。また、トップラインのモデルはプロラインに用いられるMIナンバーが付けられている。なお同シリーズのラインアップはあまり多くなく、また生産台数も少なかったため入手が難しいのが残念なところである。

本文 / 田中伊佐資

キャプション / 岡田圭司(アトリエJe-tee代表)
撮影 / 君嶋寛慶



Retro-Future

古くて新しい もうひとつのビンテージオーディオ



MI-6383

↑25cmのフルレンジユニットで、録音スタジオなどの小型業務用モニタースピーカーとして使われていた。とても大きなアルニコマグネットと軽くて反応の早いコーン紙が採用され、美しい音色で明快な中高音、厚みのあるパンチの効いた低音は有名なWEのフルレンジユニット755A、728Bを上回る魅力があるかもしれない。市場価格は18～25万円ペア



501-S1/SL-123 (MI-12654)

↑30cmの同軸型ユニットで、非常に小さいボイスコイルのウーファーに3インチのコーンタイプのツイーターが搭載されている。ウーファー部分はほとんどフルレンジとしても使えるくらい再生能力に優れているため、ツイーターとのつながりがとても良く、再生音はまるでシングルコーンスピーカーが1発で鳴っているかのよう。この2タイプはフレームのデザインこそ違いますが、ウーハー、ツイーターは全く同じ物が使われていて再生音も聞き分けがつかない。ちなみに前号で紹介した38cm同軸型モニタースピーカー LC-1も後期型のLC-1Aからhigh-fidelity シリーズになる。市場価格は18～25万円ペア



MI-12448

↑25～30cmタイプのユニット専用の家具調デザインのキャビネットで、比較的薄い12mm合板で造られていて、小柄ながらも低域再生能力に富み、立体感のあるスケールの大きい再生音は目を見張るものがある。大きめのパツル面に厚みが薄いボディと足付きのデザインが特徴で、ユニットとのマッチングが絶妙に箱をうまく共鳴させる。箱の強度が弱いためかコンディション良く残っている箱が減多にないのが残念。市場価格は20～25万円ペア

RCA

vol.2 (high-fidelity line)

前回のプロシシリーズに続き コンシューマー向けのラインを紹介

ややもすると「管球アンプ的な温かな味わい」みたいなフレーズを陳腐と思いつつも雑誌に書きちゃうことがある。よくよく考えると、これはあまりによろしくない。管球アンプをお安く一括りにしちゃっていいのかわ。RCAアンプ編の第二弾となる今回、「アトリエJe-tee」で痛感したのはそのことだった。前回のプロフェッショナル機に続いて、コンシューマーにも向けられた「ハイファイデリティ」シリーズを聴く。ならば対決してみましようというところで、聴き比べになった。両者の音は見事に違う。同じRCAでここまで違うなら、他メーカー真空管アンプの差異は推して知るべし。それをまあ「管球アンプ的」などとちやっかき一緒くたにして使っちゃう自分を大いに恥じたのである。

さて聴き比べはプロ機のMI-12188から始まった。1940年代、劇場などで活躍し、出力が70Wもある。一方のコンシューマー機はSP-20。これは50年代中期の製品で20W。行司を務めるスピーカーは、もちろんRCAのLC-1である。曲は多角的にチョイスした。イーグルスの「呪われた夜」からタイトル曲、「カントリー・ロード」からソプラノの独唱、ショパンのピアノ・ソロなどなど。プロ機はどのソフトも前に迫ってくる。遠くに飛ばす設計だから必然的にそうなる。楽器に存在感がある。特にピアノ

ノ・ソロはホールの空気込みではなく、ピアノそのものを近くで聴いている感じがした。

民生機のSP-20は楽器の質感を丁寧に浮き彫りにする。高域が伸びているから、細かな表現ができる。ソプラノもしっとり濡れて広がりがあるし、ピアノも響きや余韻が繊細だ。対応ソースの開口が広いという点で、僕の好みはSP-20である。店主の岡田圭司さんは「たいした球を使っているわけではないんですけどねえ……」と首をひねっている様子すらうかがえる。つまり回路設計がしっかりしているというふうだ。

ここでスピーカーを替えてみた。RCAの2ウェイ同軸501-S1(30cm径)をショップのオリジナルキャビネットにマウントしたものだ。生ギターのような感覚で板をわざと響かせるように設計されている。アンプはSP-20に固定し、持参したメロディ・ガルドーの「マイ・オンリー・スリル」を鳴らしてみた。シングルコーン一発のような、小さく引き締まった歌声が、さくさくと軽やかに出てきた。このすがすがしさには名スピーカーLC-1もたじたじだ。装置全体のコンビネーションが際立っていいように思った。キャビネットの背面が心地よく共振して低音を演出している。ガルドーのほのかな色香を胸いっぱい吸い込んで、この音が本日の一番かなと受け止めた。